

藤原道信年譜稿

妹尾好信

歌人藤原道信は、二十三歳で夭折した。十五歳の元服から死まで、官僚貴族としての活動期間はわずか九年に過ぎない。しかし、その短い生涯は、当時を代表する貴顕や歌詠みたちとの華やかな交流に彩られている。その様は、主に勅撰入集歌四十八首、『道信集』所収の百余首、および他の同時代歌人の家集に収められた数首の詠歌によって知られる。

道信の伝記研究には、夙に安藤太郎氏のすぐれた業績（『藤原道信の生涯について』、『言語と文芸』第三巻・第六号（昭36・11）、『平安時代私家集歌人の研究』（昭57 桜楓社）所収）があるが、本稿は、その驛尾に付して、改めて道信の生涯をできうる限り年譜の形で描こうと試みたものである。

項目の最初の数字は、月と日を表わす。また、『道信集』をはじめ歌集の引用に際しては、本文・歌番号ともに、便宜上すべて『新編国歌大観』によった。その他の文献については最初の引用箇所末尾に依拠テキストを記した。なお、括弧内に適宜注記を施した。

◎天禄三（九七二）〔1歳〕

■この年、誕生（『勅撰作者部類』・『二十一代集才子伝』の記す享年二十三から逆算）。父は藤原為光、母は藤原伊尹の娘。父為光は、右大臣師輔の九男、母は醍醐天皇第九皇女前斎宮雅子内親王、この年、従四位上、参議・左中将・備中守、三十一歳。母方の祖父伊尹は、この時、正二位、摂政太政大臣だが、同年十一月一日に四十九歳で没する。道信は、為光の三男（島原図書館松平文庫本『道信集』勅物）とも、四男（『二十一代集才子伝』）とも、五男（『中古歌仙三十六人伝』）とも言う。長兄誠信が康保元年（九六四）生まれで八歳年長、次兄齊信が康保四年（九六七）生まれで五歳年長、弟の公信は貞元二年（九七七）生まれで五歳年下である。

◎寛和二（九八六）〔15歳〕

■10・21 伯父兼家の養子となり、宮中の淑景舎（桐壺）（『尊卑分脈』は凝花舎（梅壺）とする）にて元服、従五位上に叙せられる（『日本紀略』・『尊卑分脈』・『中古歌仙三十六人伝』）。養父兼家は、この年六月二十四日に外孫一条天皇の即位により摂政となっていた。道信はこの氏長者兼家に見込まれ、養子となって、七男として扱われた（『尊卑分脈』・『道信集』勅物）。この年兼家は五十八歳。『小右記』長和元年（一〇二二）七月二十一日の記事にも「道信入大入道殿戸」とあり、道信が兼家の戸籍に入った旨を記している。

「道信」という名は、おそらくこの元服時に付けられたものであろう。為光の子が共有する「信」の字と、兼家の子が共有する「道」の字の双方を併せ持った名であり、道信にとつては、実父為光と養父兼家の二人が仰ぐべき父となったのである。

▽『日本紀略』寛和二年十月

○廿一日丙辰。右大臣息男於^{（清）}淑景舍御前加「元服」。摂政養子也。授「從五位上」。有「饗宴」。弁少納言史等預^{（之）}之。

（『神皇正統記』国史大系）

■11・10 侍従に任せられる（『中古歌仙三十六人伝』）。即位後まもない七歳の幼帝一条天皇に近侍した。

◎永延元（九八七）「16歳」

■3・13 石清水の臨時の祭に、藤原実方とともに舞人を勤める。

（『道信集』・『実方集』）。

▽『道信集』（底本榊原本）三二一〜三三三

臨時祭のまひ人にてもろとも（乃チ兼家原本）にありしをり、ふたりながら

四位になりて、まつりの日、実方中将

いにしへの山井の水にかけ見えて猶そのかみのたもとこひしも

かへし

いにしへののはなの（ ）いろいろのなかりせばわすらるる身となり

やしなまし

▽『実方集』（底本書陵部蔵二類本）五二〜五三

みちのぶの中將、りんじのまつりのまひ人にふたりありしを、もろともにしるになりてのちのまつりの日

いにしへのやまののみづにかけみえてなほそのかみのたもとこ

ひしも

返し

いにしへのころものいろのなかりせばわすらるるみとなりやし

なまし

実方は寛和二年（九八六）七月二十二日に從四位下に叙されている（『中古歌仙三十六人伝』）。道信が元服後、四位になる前の石清水八幡宮の臨時の祭はこの年か翌年のこと。竹鼻續氏が、「舞人は通常は五位以下の者十人が奉仕した」が、「代初の石清水臨時祭には通常と異なり、四位四人、五位四人、六位二人が奉仕することになっていたので、一条帝の代初の永延元年の祭には四位の実方も舞人として奉仕し」たと言われ、この年のこととされた（『実方集注釈』）
〈平5 貴重本刊行会〉のに従う。

■3・26 養父摂政兼家が東三条第で行なった春日詣の試楽の舞人の一人になる（『小右記』。「侍従道信」とあり）。一緒に舞人を勤めた人物の中に、兼家の孫伊周十四歳、源経房十九歳らがいる。

■春、実方とともに、比叡山で修行する花山院を思い出しつつ詠歌

（『道信集』・『実方集』）。

▽『道信集』一〇二

花山院思ひいできこえて

はなの木にそでを露けみをのやまの雲のうへこそおもひやらる
れ

▽『実方集』二九

道信中将と、花山の御時をおもひいでて

はなのかにそでをつゆけみをのやまのやまのうへこそおもひや
らるれ

竹鼻續氏によると、「花山院は、寛和二年(九八六)六月二十三日
に禁中を出て花山寺に赴き剃髪し、その年の秋に比叡山に登り、
「花山院の叡山滞在がいつまでかは明確でないが、永祚元年(九八
九)十月には帰洛していたことが『小右記』から知られる。したが
って、この歌は永延年間の詠作とみてよからう」と言われる(『実方
集注釈』)。一応、永延年春の作と見ておく。『実方集』では実
方の作としており、『夫木抄』(巻四・春上・一一四五)にも実方の
作として出ている。それにしても、道信とともに花山院を思い出し
ていた時の詠作である。

■9・4 右兵衛佐に任せられる(『中古歌仙三十六人伝』)。以後、
主に六衛府の武官を勤めることになる。

■10・14 正五位下に叙せられる(『中古歌仙三十六人伝』)。同日、
一条天皇が東三条第へ行幸したことに伴う叙位。この日、道隆は従
一位、道兼は従二位にそれぞれ叙された。

◎永延二(九八八) [17歳]

■正・29 左近衛少将に任せられる(『中古歌仙三十六人伝』)。
■3・25 従四位下に叙せられる(『中古歌仙三十六人伝』)。この
日、宮中の常寧殿で摂政兼家の六十賀が行なわれた(『日本紀略』・
『百練抄』)ことに伴う叙位か。

◎永祚元(九八九) [18歳]

■正・29 近江介を兼ねる(『中古歌仙三十六人伝』)。
■3・4 但馬権守を兼ねる(『中古歌仙三十六人伝』)。

■3・13 石清水の臨時の祭の日に、かつてともに舞人を勤めた折
(永延元年の項参照)を回想して、実方と贈答する(『道信集』・『実
方集』)。翌年以降の可能性もあるが、おそらくこの年のことであ
らう。

■3・20 宮中で一条天皇の春日社行幸の試楽が行なわれ、左馬頭
藤原正光(兼通六男、三十三歳とともに一の舞を舞う(『小右記』。
「右少弁道信」とあるが、「左少将」の誤りか)。

■10・20 弓場始に出居の次将を勤める(『小右記』)。

■12・20 養父兼家の任太政大臣の大饗に際し、源宣方とともに録
事(酒を勤めに行く役)を勤める(『小右記』。「左四位少将道信」と
あり)。

◎正暦元(九九〇) [19歳]

■正月、叙爵して殿上を下りることになった六位藏人源為相と連歌

するか(『道信集』)。

▽『道信集』四七

源式部ためすけ、をるべきほどすぎて

くものうへのつるばみごろもぬぎすてて

とうれふるに

さはにとしへむことのわびしき

竹鼻績氏が、『実方集』(六二二)に、

ためすけ、かうぶりうべきまへのとし、八月つきあかき夜、

ものがたりして

かぞふればまいつつきになりにつけり

ためすけ

むつきにならばとふ人もあらし

とある短連歌の詠作年次を永祚元年(九八九)八月のことと考証され、
為相の叙爵を正暦元年(九九〇)正月と推定された(『実方集注釈』)の
に從う。この道信との連歌は為相の叙爵時のもので、為相が蔵人
として殿上にいられる時が過ぎてしまったことを嘆いたのに付けて、
道信は為相が地方に赴任して何年もの間遠く離れて暮らすことにな
るのがつらいと詠んだ。為相は歌人源信明の息、従五位下、丹波権
守(『尊卑分脈』)、生没年未詳。

■同じ頃、出雲守に任じて赴任する藤原相如に、餞別の歌を贈るか

(『道信集』)。

▽『道信集』五四

すけゆきの朝臣、いづもになりてくだるに、権少将なども
あり

あかずしてかくわかるるにたよりあらばいかにとだにもとひに

おこせよ

藤原相如は、『栄花物語』「見果てぬ夢」によると、長徳元年(九

九五)四月下旬に「出雲前司」と呼ばれているので、この年あたりの

任官かと考えられる。歌からは季節が分からないが、国司の任官は

正月の除目であることが多いので、春のことか。餞別の宴に同席し

た「権少将」は源宣方であろう。

■7・2 養父摂政太政大臣兼家麿(六十二歳)。

■秋、女院(東三条院詮子)のもとで、公任とともに権の花を見て詠

歌(『公任集』・『道信集』)。

▽『公任集』三五八〜三五九

女院にてあさがほを見給ひて

あすしらぬ露のよにふる人にだに猶はかなしとみゆる朝がほ

みちのぶの少将

朝がほを何はかなしと思ふらん人も花のさこそみるらん

▽『道信集』一八

殿上にてこれかれよのはかなきことをいひて、あさがほの

花みるといふところを

あさがほをなにはかなしと思ひけん人もはなはさこそ見ら

め

『道信集』では宮中の殿上の間での詠作となっており、また『拾遺集』（巻二十・哀傷・一二八三）には、「あさがほの花を人のもとにつかはすとて」と詞書があって、それぞれ詠作状況が異なるが、

『公任集』の伝えによれば、女院詮子のもとで世の無常を嘆く歌を詠んだのは、女院の父である兼家の死去直後のことと考えられよう。

■この後、亡き兼家の子、内大臣道兼の養子になり、その北の方の妹（藤原遠暲女）と結婚したか（『道信集』・『栄花物語』見果てぬ夢

・『二十一代集才子伝』）。

▽『道信集』四九

左大臣殿のむこになりてのつとめて

あまのはらあくるにくるるよなりせばなかなかさになげかざ
らまし

▽『栄花物語』見果てぬ夢

又（道兼ハ）一条の太政大臣（の）御子の中将をぞ我子にし給て、

この北の方の御おとうとをあはせ奉り給て、よろづに扱ひきこ
え給ふ。

（『栄花物語全注釈』）

『道信集』の詞書にある「左大臣殿」は「内大臣殿」の誤りであろう。

書陵部蔵甲本に「左大将殿」とあるのは、道兼の兼官である「右大将」の誤りか。正暦元年（九九〇）現在の左大臣は源雅信（七十三歳）、左大将は藤原濟時（五十二歳）であるが、道信が彼らの娘と結婚したとは考え難い。「むこになりて」とあることから、道兼は、妻の妹を養女にして養子の道信と結婚させたかと考えられる。

◎正暦二（九九二）「20歳」

■春、遠江守として赴任する源為憲の餞別に扇を贈って詠歌（『道信集』・『後拾遺集』）。

▽『道信集』五二

ためなりのあそん、とほたふみになりてくだるに、あふぎ
つかはすとて

わかれてのよとせのはるの春ごとにはなのみやこを思ひおこせ
よ

▽『後拾遺集』巻八・別・四五四

遠江守為憲まかりくだりけるに、あるところよりあふぎつ
かはしけるによめる

わかれてのよとせのはるのほるごにはなのみやこを思ひおこ
せよ

『道信集』の「ためなり」（書陵部蔵甲本は「ためふ」）は「為憲」の誤りであろう。源為憲の遠江守任官は、『本朝文粹』巻六「奏状中」所収の「申美濃加賀等守」状の冒頭に、「右為憲、去正暦二年、拝任遠江守」云々とあるので、正暦二年（九九二）のことと知られる。

■2・12 円融院崩御（二十三歳）。

■春、円融院を偲んで、桜の枝につけて実方と贈答（『道信集』・『実方集』・『新古今集』・『栄花物語』見果てぬ夢）。

▽『道信集』二五〜二六

みかどうせさせたまひたるころ、おもしろきさくらにつけて、実方中将に

すみぞめのころもつきよのはなざかりをりわすれてもをりけるかな

返し

あかざりし花をやはるもこひつらんありしむかしを思ひやりつ

▽『実方集』二六〇二七

おなじころ、道信の中將花につけて

すみぞめのころもつきよのはなざかりをりわすれてもをりけるかな

返し

あかざりしはなをやはるのこひつらむありしむかしをおもひいでつ

『新古今集』(巻八・哀傷・七六〇)・『実方集』書陵部蔵異本(七

六)等では、「墨染めの」の歌を実方作とする。どちらが正しいかは確定できないが、おそらく道信歌であろう。

■晩春、円融院を偲んで法住寺に籠り、権少将(源宣方)と贈答する(『道信集』)。

▽『道信集』五八〇五九

〔集〕のみかどうせ給ひてのとし、法住寺につれづれにこもりゐたるに、権少将のもとより

つねならば衣のいろもいかでかははなのかたみもいかがそむべき

かへし、きを花かふみの中にいれて、せんどう歌

これがいろにころもそめずなりぬれば花のかはよのつねならぬかたみとも見よ

詞書の欠字部分について、道信の在世中に崩御した帝は円融天皇以外にはないので、円融院をさすことは間違いない。

■9・21 左近衛中将に転じる(『中古歌仙三十六人伝』)。

■10・15 東三条院詮子、長谷寺に参詣(『百練抄』)。この時、道信も随行し、女院の長谷寺滞在中に月を見て詠歌(『道信集』)。

▽『道信集』八六

女院はつせにまうで給ひて、まだ夜のふかければいでたまはぬほどに、月いとあかくすみたれば、ながむるに

そむけどもなほよろづよをありあけの月の光ぞはるけかりける

◎正暦三(九九二)「21歳」

■正・10 美濃権守を兼ねる(『中古歌仙三十六人伝』)。

■6・16 実父太政大臣が光薨(五十一歳)。これより一年間の喪に服する。四十九日の中陰が明けるまで、道信は父が建立し菩提寺とした法住寺に籠っていたらしい。この間に、花山院が弔問の使者を寄越し、歌を贈答する(『道信集』)。

▽『道信集』三九〇四〇

ご殿の御物いみにてまだえいでぬに、花山院、御使にてお

ほせたまへる

おほかたになくむしのねもこのあきはこころありてもおもほゆるかな

御返し

あきばかりなく虫のねもあるものをかきらぬこゑはきこゆらんやぞ

■8・5 亡父為光の四十九日の法要が法住寺で行なわれる（『日本紀略』）。

▽『日本紀略』正暦三年八月

○五日丙寅。於法住寺修故太政大臣四十九日法事。

道信も法住寺を出て、権少将（源宣方）に歌を贈る（『道信集』）。

▽『道信集』四一

かくて、寺よりかへりて、よの中心ほそくながめらる、むしのねもさまざまきこゆるゆふぐれに、権少将のもとへこゑそふるむしよりほかにこのあきは又とふ人もなくてこそふれ

この歌は、同じ『道信集』（一〇—一一）に、次のような形でも載っており、道信の詠歌に「右近中将信賢」が唱和している。

一条どののぶくなる秋ごろ

このあきはむしよりほかのこゑならでまたとふ人もなくてこそふれ

右近中将信賢

わがやどのつゆのうへにもしのぶらんよのつねならぬ秋のかぜに

「信賢」は「宣方」の誤りまたは当て字で、同一歌の異伝と見られる（拙稿「『道信集』人物考——「右近中将信賢」と「権少将」について——」『古代中世国文学』第八号（平8・5）参照）。

■この頃、月夜に、ある女のもとに歌を贈る（『道信集』）。

▽『道信集』二一

ぶくにて、ある女のもとに、月のあかきよいきて、又のつとめて

ほしもあへぬころものいろにくらされてつきともいはずまどひぬるかな

◎正暦四（九九三）「22歳」

■春、亡父為光を悼む歌を連作する（『道信集』）。

▽『道信集』六五—六九

ことうせたまへる又のとしの春、つれづれなるに

おほあらしの野へのわかきおひそはるあめはやますもふりまさるかな

のこりの花

ちりのこるはなもありけるこのはるをわれひとりとも思ひけるかな

かへるかり

ゆきかへりたびにとしふるかりがねはいくそのはるをそらにみるらん

山ぶき

かはづなきなけばさきぬるやまぶきのくちなし色にいかでみらん

こひ

よをなべてこひてふことはなれぬれどいかになましくりかへしつ

■6・13 亡父為光の一周忌法要（『小右記目録』）。この日、喪明けに際して歌を詠む（『道信集』・『拾遺集』その他）。

▽『道信集』六三

ことの御ぶくぬぎしひ、大僧都のもとに

かぎりあればけふぬぎすてつふじころもはてなきものはなみだなりけり

「大僧都」は誰か不明だが、正暦三（九九二年）九月二十八日まで天台座主を勤めた大僧都陽生か、あるいは同年十月二日に座主を拝した暹賀かであろう。陽生は、この年間十一月二十一日入滅、享年八十七。暹賀は、正暦二年（九九一年）九月二十一日に権大僧都から大僧都に転じた。この年八十歳（以上、「僧綱補任」）。

■7・26 相撲内取に際し、右大臣源重信（七十二歳）・内大臣藤原道兼（三十三歳）とともに帝の御前に伺候する（『権記』。「中将道信朝臣」とあり）。

■7・27 相撲召合に際し、出居の次将を勤める（『小右記』。「左中将道信」とあり）。

◎正暦五（九九四）「23歳」

■正・12 近衛府の功勞により、従四位上に叙せられる（『中古歌仙三十六人伝』）。

■2・2 春日祭の近衛使となって奈良に出向き、内大臣道兼と歌を贈答するか（『道信集』）。

▽『道信集』六〇七

春日の使にて、内大臣殿より

おぼつかなきかきの山のはるがすみいかがちてしみてもつげなん

返し

いはねどもみかさのやまの春がすみたなびくかたはころあるらし

「内大臣」は、道信との関係から見て、道兼と考えられる。それ以前は道隆であるが、道隆は正暦元年（九九〇）五月以来摂政を兼ねているから、「内大臣殿」と呼ぶのは不適當であろう。道兼の任内大臣は、正暦二年（九九一年）九月七日。以後、道信の没した正暦五年（九九四）までの春日祭は三回あるが、正暦三年（九九二）は円融法皇の諒闇のため行なわれなかったと覚しく、翌四年は、道信の実父為光の喪中である。よって、正暦五年（九九四）二月二日（『日本紀略』

・『本朝世紀』の春日祭の時のことと考えられる。

■七月初め、婉子女王が藤原実資と結婚か。女王に恋慕していた道信はそれを知って衝撃を受け、傷心の歌を女王に届ける（『道信集』・三奏本『金葉集』・『詞花集』・『栄花物語』見果てぬ夢・『大鏡』実頼伝・『大鏡』師輔伝）。

▽『道信集』一六

あるところに、うらやましきことをききてきこゆる

うれしきはいかばかりかは思ふらんうきは身にしむものにぞ有りける

▽三奏本『金葉集』卷七・恋歌上・三六八

女のがりつかはしける

藤原道信朝臣

うれしきはいかばかりかは思ふらんうきは身にしむ物にぞありける

▽『詞花集』卷七・恋上・二二三

（題不知）

藤原道信朝臣

うれしきはいかばかりかはおもふらんうきは身にしむものにぞありける

▽『栄花物語』見果てぬ夢

小野宮の実資中納言、式部卿宮の御女、花山院の女御に通ひ給ふといふ事出できたれば、一条の道信中将さし置かせける、

嬉しきはいかばかりかはおもふらん憂きは身にしむ心地こそすれ

我も懸想しきこえけるにや。（『栄花物語全注釈』）

▽『大鏡』実頼伝

（実資）北の方は、花山院の女御、為平の式部卿の御女。院そむかせたまひて、道信の中将も懸想しまうしたまふに、この殿（実資）まゐりたまひにけるを聞きて、中将の聞えたまひしぞかし、

うれしきはいかばかりかはおもふらん憂きは身にしむ心地こそすれ

この女御、殿（実資）にさぶらひたまひしなり。

▽『大鏡』師輔伝（『日本古典文学全集』）

帝（花山天皇）、出家したまひなどせさせたまひて後、また今の小野宮の右大臣殿（実資）の北の方にならせたまへりしよ、いとあやしかりし御ことどもぞかし。その女御殿（婉子女王）には、道信の中将の君も御消息聞えたまひけるに、それはさもなくて、かの大臣に具したまひければ、中将の申したまふぞかし、「憂きは身にしむ心地こそすれ」とは、今に人の口にのりたる秀歌にて侍めり。

このあたりの経緯については、拙稿「道信中将の愛と死をめぐる憶説——『公任集』の読解を中心に——」（『国文学攷』第一四三号〈平6・9〉）参照。

7・11 卒去（『小右記目録』）。享年二十三（『勅撰作者部類』）

そすれ

『二十一代集才子伝』。

▽『勅撰作者部類』

道信

四位上中將・藤原朝臣
公純正暦五年生

(『八代集全註』)

(『大日本史料』所引本には「正暦五卒廿三」との異文注記あり)

▽『二十一代集才子伝』

藤原道信

道信者、恒徳公之第四子。母謙徳公之女也。為粟田関白道兼之

猶子。叙從四位上、任左近中將。(中略)正暦五年卒。時

年二十三。早世惜哉。

(『八代集全註』)

■臨終に際し、北の方に向けて歌を詠む(『道信集』・『千載集』)。

▽『道信集』九三

いたうわづらひ給ひければほかにわたしたてまつりけるに、

かぎりにおほしければ、きたの方の御もとへ山ぶきのきぬ

たてまつり給ふとて

くちなしの色にやふかくそみにけん思ふ事をもいはでやみにし

▽『千載集』卷九・哀傷歌・五四九

わづらひ侍りけるがいとよわくなりけるに、いかなるかた

みにか有りけむ、やまぶきなるきぬをぬぎて、その女につ

かはし侍りける

藤原道信朝臣

くちなしのそのにやわが身入りにけんおもふことをもいはでや

みぬる

又いはく、みまかりてのち、女のゆめにみえてかくよみ

侍りけるとも

■葬送の翌朝、藤原頼孝が道信追悼の歌を詠む(『千載集』)。

▽『千載集』卷九・哀傷歌・五五〇

中將道信朝臣みまかりにけるを、おくりをさめての朝によ

める

藤原頼孝

おもひかねきのふのそらをながむればそれかとみゆる雲だにも

なし

同歌は、『玄々集』(一一二二)・『統詞花集』(卷九・哀傷・四一

三)などにも載る。頼孝は、貞嗣流、正五位下播磨守季孝男、從五

位上山城守、冷泉院判官代、あるいは、六位、良門流、正五位下出

雲甲斐権守頼経男とも(『尊卑分脈』)。道信との関係は不明。

■秋、藤原実方が道信追慕の歌を詠む(『後拾遺集』)。

▽『後拾遺集』卷十・哀傷・五七〇

道信朝臣ともろともにもみちみむとちぎりてはべりけるに

かのひとみまかりてのあきよみ侍ける 藤原実方朝臣

みむといひし人ははかなくきえにしをひとりつゆけき秋のはな

かな

*

*

以上、遺漏や失考の多い年譜になったことを恐れるが、今後改訂を加えてより完全なものにしていきたい。ご教示を御願います。

——せのお・よしのぶ、広島大学文学部助教——